弟ジョンへの手紙に表れた
ギルバート・ホワイトの思想

門　井　昭　夫

Gilbert White's Thoughts Found in His Letters Addressed to His Brother John

Akio Kadoi

抄　録

『セルボーン博物誌』の著者ギルバート・ホワイトは自然研究の範囲を広げ、発展させるために、当時ジブラルタルに住んでいた弟のジョンに自然観察を毎日行うことを勧めた。ジョンは兄の助言を得て自然観察を行い、標本を集め、兄に送り、手紙を書いて疑問点を訊ねるなどした。

ギルバートからジョンに宛てた31通の手紙を読むと、ギルバートの思想、また当時の自然研究がどのような状況にあったかがわかる。17世紀と18世紀に知られるようになった生物の種の数は著しく増大し、それらを分類する方法がぜひ必要であった。レイとリンネは動植物の種を体系的に配列する方法を築いた主要な博物学者であったが、リンネの分類体系はイングランドでは不人気であった。ギルバートはリンネの分類に批判的であり、レイ、その他の研究者の鳥類の記述に対して時に満足しなかった。

ジョンのジブラルタルでの研究を「ジブラルタル博物誌」として出版させるべくギルバートは支援をしたが、その努力も空しくジョンの著書は日の目を見なかった。その理由と未刊に終った事情をギルバートの手紙から明らかにする。

そのほか手紙に書かれているギルバートの心境、甥のジャックとの日常生活などについても考察する。

キーワード：ギルバート・ホワイト
ジョン・ホワイト
カール・フォン・リンネ
『セルボーン博物誌』
博物誌
18世紀

はじめに

『セルボーン博物誌』（*The Natural History and Antiquities of Selborne*）の著者ギルバート・ホワイト（Gilbert White, 1720-93）には５人の弟と２人の妹がいた。弟は上から順にトマス[1)]、ベンジャミン[2)]、ジョン[3)]、フランシス（Francis）、ヘンリー[4)]である。このうちフランシスは21歳か22歳の若さで1750年に亡くなっており、ギルバートの自然研究に深く関りのあるのはベンジャミンとジョンの二人である。ベンジャミンはロンドンで博物学書の出版販売業を営み、繁昌していた。そのため書店には自然研究の関係者が多く集まり、ギルバートが後に『セルボーン博物誌』の元となる書簡を交すことになる有名な博物学者ペナント（Thomas Pennant）と知合いになったのも、このベンジャミンの書店においてであった。ジョンはギルバートと同じくオックスフォード大学に学んで聖職に就き、1756年に英領ジブラルタルの駐屯軍付牧師となって赴任した。ジブラルタル在任中に動物を中心とする自然研究を行い、主に研究上のことで兄ギルバートと頻繁に手紙のやり取りをした。

兄弟で交した手紙のうちギルバートの書いたものはトマス・ベル（Thomas Bell）編の『セルボーン博物誌』の第２巻に収められている。そこで見られるのは1770年５月26日付の第１信から、ジョン宛の最後のものと推定されている1777年10月31日付の第31信までである。このジョン宛のギルバートの手紙には、当時の自然研究の状況、ギルバートの問題意識、ジョンのジブラルタルでの研究成果の出版を援助しようとするギルバートの熱意、また他の兄弟や親戚など身内の動静も記されていて興味深い。本稿では上記31通の手紙をつぶさに読んで幾つかの内容にまとめ、そこから明確に読取れるギルバート・ホワイトの思想、人間性、当時の自然研究の問題点、その他を考察する。

１．当時の博物学の研究状況

スウェーデンのウプサラ大学の植物学教授代理を務めていたリンネ（Carolus Linnaeus/Carl von Linné, 1707-78）はウプサラ・アカデミーの命を受けて1732年にラップランドに標本採集旅行に出掛けた。二人のラップ人を伴ってラップランドとスウェーデンおよびノルウェーの北部の大部分を探索した。その距離7,400キロメートル余に及ぶ大旅行であった。この旅行でリンネは多くの野生動物を観察し、100種の植物の新種を発見した。

次いでリンネはドイツ、オランダ、イングランド、フランスを訪れた。この旅行の間にリンネは有名な著作『自然の体系』（*Systema Naturae*）の草稿を準備した。『自然の体系』は1735年にオランダで出版されたが、その後改訂増補されて1758年に出版された第10版が標準的なものになっている。リンネは分類法に対して強い熱意を持っており、植物と動物の分類表を作っただけではなく、鉱物、さらには病気の分類表をも作った。リンネは『自然の体系』で自然分類を目指したが、本当の意味での自然分類法は発見できなかった。

ジョンはジブラルタルで採集した標本で名前のわからないものはリンネの本を調べ、それでもわからないものはギルバートに送って教えてもらっていた。しかし、送ったという手紙がきたにも拘らず、肝心の標本がギルバートの手元に届かないことがあった。

> ２月19日付のお手紙を受取ったことにまず感謝致します。標本の入った箱の着くのを待っていなければ、そのお手紙にはこれより前にご返事できたでしょう。それらの標本に関しては私が何らかの記述をすることを、当然のことながら期待なさっておられるでしょう。〔第１信：セルボーン発1770年５月26日〕

ジョンから送られた標本の着くのを待っていたために返事をするのが著しく遅れたが、気持ちよく文通を続けるためには、ギルバートはそれ以上待って返事を遅らせることはできなかった。

ジョンからの手紙には昆虫についての質問が幾つかあった。初めはスズメバチに関するもので、ギルバートはこう返事する。

> 紫色の翅を持ったスズメバチ（*Vespae*）は美しい稀少種です。ウィラビー（Francis Willughby）の言う *Vespae crabrony congeners in Italia captae* で、レイ（Ray）の『昆虫誌』の250ページに明確に記述されています。

「このスズメバチが何を食べているかを観察し、また巣の造り方はどうかを調べてもらいたい」と要望する。長い腎臓形の翅を持ったチョウのような昆虫について調べた結果を記す。この昆虫は「好奇心をそそる珍種でシリアゲムシ（*Panorpa coa* Lin.）とわかりました。これはわずかの所にしか見られないことはご存知でしょう。スコポリ（Giovanni Antonio Scopoli）はこの昆虫について何も知りません。」とイタリアの有名な博物学者をこき下ろす。標本をさらに幾つか送って欲しいと所望し、「どのように、どこで繁殖するかを観察して下さい。」と自分の目で実際に観察することを要請する。本によって調べたところでは「この昆虫は水棲で、水の中でおそらくカゲロウとトビケラのように孵化するのでしょう。」と推測する。しかし野外で観察した事実を元にして結論を出すという実証主義の研究者であったギルバートは、他人の著書に書かれていることをそのままは信用しない。

とりわけ鳥類に深い関心を抱いていたギルバートはジブラルタルで見られる鳥について観察することをジョンに望む。「ミズナギドリ（*Petrels*）と呼ばれる属の鳥を注意して観察なさい。生活様式が非常に特異で大西洋に棲んでいます。おそらくジブラルタル海峡に入ってくるでしょう。」

リンネの『自然の体系』はギルバートもジョンも事あるごとに参照していたが、この著書の内容は十全なものではなく、兄弟はしばしば疑問を抱くことがあった。

リンネはその主張の幾つかがあまりに大まか過ぎ、全体的な分類の規則ではあまりに多くの例外が生じます。このことは『自然の体系』を読んでいる間に既に気づいておられるに違いありません。〔第１信〕

ジョンがリンネの著書を愛好し始めていることを知ったギルバートはそのことを喜び、博物学の研究者としてはまだ駆出しであるジョンに研究者としての心得などをいろいろと教える。博物学の研究では標本図が大きな意味を持つが、リンネの著書について「昆虫の図版はひどい」と言い、「ジョフルワー（Geoffroy）の本のが私が見た最良のものです。」と言う〔第２信：セルボーン発1771年１月25日〕。ジブラルタルの植物を研究する方法に関連しては「植物学者あるいはその後継者を見つけ出し、あなたの地方の植物を入手しようと努力することは価値のあることでしょう。」と、提案する〔第１信〕。

リンネが記述している標本の収集範囲が偏っていたり、採集された標本の数にも限りがあることは当然のことであるが、北アフリカのバーバリ地方（Barbary）の昆虫についての裏話として次のように言う。「リンネがバーバリ産の多数の昆虫について言及している理由はアルジェ駐在のスウェーデン領事のブランデル氏がリンネに膨大な数の収集品を送ったからです。」と〔第２信〕。

レイ（John Ray, 1627-1705）は当時非常に大きな影響を及ぼしたイギリスの博物学者であり、リンネに先立って動植物の種を体系的に分類することを目指し、生物分類学の基礎を築いた。レイはヨーロッパを広く旅行して植物と動物を研究した。その主要著書には植物に関するもののほか、鳥類、魚類、昆虫に関するものがある。ジョンからの質問に答えてギルバートはレイに言及する。「あなたの言うセキレイの５番はおそらくレイのユキヒメドリ（*Junco*）であると思われますが、レイはいつもほど正確とは思えません。固い尾については言及しておりますが、尾の端にある白と黒の縞については言及するのを省略しています。」と、批判的に言う〔第２信〕。鳥について十分な知識を持っているギルバートはレイの記述に満足せず、続けてこう言う。「レイはハチクイ属（*Merops*）の腿がむき出しのままであることには注意を払っていません。」と、レイの見落した点を指摘する。またペナントがその著『英国動物誌』の中でスゲヨシキリについてよく知らずに誤りを犯したのは「レイがこの鳥を“*Picis affines*”の中に分類している」ことによるものだとして、その分類の誤りを指摘している〔第５信：セルボーン発1773年８月２日〕。

２．ホワイト兄弟とリンネ

ジョンは兄に勧められて分類上の疑問をリンネに手紙で訊ねた。しかし、リンネからは返事がこないので、そのことを兄に伝えるとギルバートは「リンネから返事がもらえないのは残念です。また手紙を出すべきです。」と答える〔第５信〕。この手紙の追伸部分でギルバートは弟のヘンリーがオックスフォードで聞いたこととして「リンネは亡く

なったに違いない」と書いているが、編者のベルは脚注で「これは誤報である。リンネは1778年１月８日に71歳で亡くなった。」としている。当時リンネからの連絡が他の方面でも途絶えたことが死亡説という誤った推測を生んだのであろう。

しかし、ギルバートもジョンもリンネの死亡説を信じていたわけではないことは確かである。リンネからの返事はようやくきた。けれども、返事が遅れたのは使用された言語のせいではないかとギルバートは心配して「リンネには何語で手紙を書いたのですか。それにリンネは何語で返事をしてきましたか。」と訊く〔第11信：ファリンドン発３月６日。この手紙には年が書かれていないが、遅くとも1774年と推定されている〕。ジョンとリンネとの間で交された手紙が合せて10通、ベル編の『セルボーン博物誌』に収められているが、これで見るとジョンはリンネ宛に初めの３通（1771年６月30日付、1773年１月１日付、同年11月26日付）は英語で、後の３通（1774年３月１日付、同年４月22日付、同年10月22日付）はラテン語で書いている。これに対してリンネからの４通（1772年１月20日付、同年８月７日付、1774年１月２日付、同年７月３日付）の返事は何れもラテン語で書かれている。

ジョンは1773年の初めにリンネ宛に手紙を出したが、1772年８月７日以後リンネから何も言ってこないので、ジョンは心配になってリンネ宛に次のように書く。

> 今年の元日に、1772年８月７日付のお手紙に答えて、非常に長いお手紙を差上げ、ジブラルタルから帰り、イングランドに住むようになったことをお知らせし、また先生がご返事をお書きになった時には完全にお調べになっていなかった鳥に関して、その後のご感想をお聞きしたく思いました。
>
> 今やほとんど10ヶ月が過ぎましたが、その後お便りがありませんので、私の手紙がきちんと着かなかったか、科学を愛する者すべてが望んでいるに違いない先生の健康状態が、多年の間、神のご加護によるも、よろしくないのではないかと心配になり始めました〔1773年11月26日〕。

手紙での使用言語に関して兄の気遣いを意識してジョンはリンネにこう言う。「私はまた前のように私の母語で書きますが、それは英語が先生には同じようにお解りになると推測し、また私がラテン語では英語と同じように容易に表現する修練を欠いているからです。しかしながら、もしも英語で説明されることでご不便をお掛けするようなことがあれば、ラテン語を使うことにして、これからは英語で書くのは止めにするつもりです。」と言って、次の手紙からはラテン語で書いたのであった。兄ギルバートの懸念したことを考慮に入れ、ジョンはリンネに英語で書かないほうがよいかを訊ねる。リンネがこれに対してどう答えたかはわからないのだが、ジョンはリンネがいつもラテン語で書いてくることから察して、上に記したように1774年の手紙からはラテン語で書いたのであった。

ギルバートはジョンに「リンネに標本を送るよう、それもあなたが最も関心を抱くも

のだけではなく、ありふれたものであってもリンネには国の環境から馴染みがないと思われるものも送るのがよい。彼はきっと率直に振舞い、あなたが容易に分類できないものに関して最上の情報をくれることでしょう。」と示唆する〔第12信：セルボーン発1774年３月29日〕。

リンネが『自然の体系』の中でヒツジバエの一種に関して誤りを犯していることを注意してやるべきと、ギルバートはジョンに言う〔第17信：セルボーン発1774年９月26日〕。そしてギルバートは「多くの誤りを訂正し、『自然の体系』の中で間違った所に置かれているものを新たに配列し直す手立てにあなたはなるだろうと、私は理解します。出来るだけ完全な『自然の体系』を見たいと思いますので。」と言う。

ギルバートはジョンを通じてリンネに有益な情報を伝えていた。「次にリンネに手紙を書く時にはカメについて書いてください。」〔第17信〕と言って、カメの甲には隙間が前方にあるのと後方にあるのとがある。これらの隙間は両側をいわば柱によって支えられており、閉じているものはないことを説明する。これはギルバートが叔母のスヌーク夫人からもらったカメのティモシーの甲の構造を観察した結果わかったことであった。リンネはジョンの手紙に記されたギルバートの示唆によってカメに２科あることを初めて思いつくのだが、その観察者がジョンではなくギルバートであることは知らなかった[5)]。

リンネが脳卒中の最初の発作で倒れたのは1774年５月のことであったが、そのことをギルバートが知ったのはしばらく経ってからであった。「パドレ・フローロス（Padre Floroz）と文通して下さい。リンネはもはや書くことができませんから。」と、ギルバートがロンドンから書いたのは1776年１月30日のことであった〔第21信〕。おそらく、ロンドンで書店を営んでいた弟ベンジャミンから聞いたのであろう。

リンネはその後回復して活動していたようである。そのためギルバートはジョンに次のように言っている。「リンネに手紙を書いてください。というのは、もしも彼があなたの新しい属などについてのみ話し、種名は定めないとすれば、あなたを見捨てることになるからです。リンネへの宛名は学士院会員としてください。その理由は前信に書いたとおりです。」と〔第24信：ファイフィールド発1776年５月15日〕。リンネの宛名をウプサラ大学教授とせずに学士院会員とすれば、学士院は国立の学会なので手紙はすべて無料で届くと、ギルバートは人から教えられていたのであった〔第23信：テムズ街発1776年５月５日〕。ところが、リンネはこの頃二度目で最もひどい脳卒中の発作を起こしていたのであった。ジョンはリンネに1774年10月８日付の手紙を出しているが、これはリンネに読まれなかった可能性があるといわれる。リンネが亡くなったのは1778年１月10日のことであるが、二度目の脳卒中により読み書きする仕事は終りにすることを余儀なくされていたからである[6)]。

３．ジョンの「ジブラルタル博物誌」出版の問題

ジョンは1756年から1772年までの16年間、ジブラルタルの駐屯軍付牧師としての任に

あった。この間にジョンはギルバートに促されて最後の4年間に自然研究を行うようになり、鳥類の渡りと魚類の回遊に関心を向け、ジブラルタルの植物、化石、昆虫にも注意するようになった。ギルバートがジョンに自然研究を勧めたわけは、ある特定の地域を詳しく調査することは重要であり、すべての地域にモノグラフを書くような博物学者がそれぞれいるべきだと日頃から考えていたからである。また博物学の生命、精髄は「地方に住む人々が動物、とりわけその生態、習性、行動、生活の営みを日々観察してくれることである」と述べているからである[7)]。ジョンの観察を正確で綿密なものとしてギルバートは信頼するようになり、『セルボーン博物誌』の中で何度かジブラルタルの動物、特に鳥類に言及し、「非常に正確な観察者」〔デインズ・バリングトン宛第14信〕、「優れた観察者」〔同第21信〕、「ジブラルタルに長年住み、好奇心の強い観察者」〔同第43信〕とジョンを評価している。

ジョンが兄の勧めでリンネと文通をするようになり、研究上の疑問を質し、標本も送るようになったことは既に述べたが、リンネ宛の第1信〔1771年6月30日付〕は自己紹介で、ジョンは標本を送ることと自らの研究について次のように言う。

> 自然界に関する知識を真に愛する人々にとっては、これまで旅行家によって行われたよりも、少しは正確に調べられ提示された当地の産品を幾つかご覧になることは、何らかのご満足を得られるものであろうと存じます。旅行家は一般に博物を特殊扱いし、その著作の中で最も欠陥のある部分にしたままです。私の調査はこれまで、この要塞とその周辺とに限られてきました。その理由は私が職務の都合でいつもここに住んでいなければならないからです。

ギルバートがジョン宛の手紙の中でしばしば言及し、文字通り親身に心配しているのはジョンの研究を一冊の本にまとめ、「ジブラルタル博物誌」として上梓することであった。その内容については言うまでもなく、分量、文章表現、図版、本の体裁から出版のための資金に至るまで、いろいろと気遣っている。内容に関してはモロッコのことも一章設けて記すとよい、また鉱物のことも無視しないようにと忠告する〔第1信〕。ロンドンで書籍出版販売業を営む弟ベンジャミンの考えをジョンに伝えて、ギルバートはこう記す。

> 動物誌には出来るだけたくさんの図版を入れなければならないと、ベンジャミンは言っています。「図入りの本を見る」のが今は流行だからです。昆虫は一番骨が折れるところでしょうが、おそらく大抵の読者にとっては、あなたの本の中で最も面白くない部分となるでしょうから、駆け足で進むのがよいと思います。

体裁に関しては、タイトルページ（扉）に入る書名と副題をジョンは“Fauna Calpensis,”“Hist. Nat. : Observations in Lat. 36°”「ジブラルタル動物誌―北緯36度にお

ける博物観察記」としたかったのに対して、ギルバートは改良したほうがよいと、ベンジャミンの意見も交えながら自分の考えを述べる。

ベンジャミンは「ジブラルタル動物誌」を出版した場合、図版と印刷の費用を除いてジョンに幾ら払ってくれるのかを、ジョンは知りたかったようである。それを聞いたギルバートはベンジャミンに手紙で訊ねなさいと言う〔第19信：ファイフィールド発1775年３月９日〕。ベンジャミンはジョンの本を出版するのを見合せたい気持ちがあり、ジョンはそのことにかなり不満を抱いていた。弟二人の間に立ってギルバートは、何とかジョンの出版を実現したいと、心を砕いていた。「書店というのは本を世の中に売り込んでくれる力を確かに持っています。ですから、そういう力を獲得し、無理にでも販路をつけてくれるのは大いに賞賛すべき骨折りに違いない。」と、ベンジャミンの存在することの有難さをジョンに理解させようとする〔第19信〕。ジョンの手元には参考にすべき博物学関係の本がないことを心配して、ギルバートは「あなたが動物誌を完成させるまで、目的にかなう本をどんな条件で使わせてくれるか知りたいということも、ベンジャミンに問合せてはどうでしょうか。」と助言する〔同上〕。

第19信の追伸の部分でギルバートは、ジョンの著書はペナントの『英国動物誌』の新版に比べてもはるかに新しくてオリジナルな情報を内容としているから、「あなたを動物学者の第一人者と見たい。」という褒めようである。「奇聞や真正の博物誌に関しては、他の人の著作から借用するのが少なければ少ないほど良い。あなたには自分自身の多大な蓄積があるのですから。」と、自分で行う観察によって得られる事実の蓄積こそ大事なのだという日頃の信念を述べ、ジョンを励まし自信を持たせる。

ギルバートはジョンの「動物誌に期待し、自分はその養父のような気持ちでおり、立派な子供に育ってきていると聞いて喜ばしく思う。」と言う〔第20信：セルボーン発1775年10月４日〕。ジョンから原稿が送られてき、求めに応じてギルバートは原稿に対する率直な批評を書くのだが、「私のことを教訓的だとか無遠慮だとか思ってはなりません」と、弟の自尊心を傷つけないように予め断わっておく〔第21信：ロンドン発1776年１月30日〕。まず気象などの表について、「隔頁の動物暦と興味深い同時発生の事柄を入れて楽しいもの、多角的なものにするのがよいでしょう。読者の大多数は数字のように見えるものは何でも飛ばしてしまいがちですから。」と、改良案を提言する。索引については「索引はおそらくあなたの頭には全くなかったでしょう。けれども、そういうものがこのような大著には期待されましょう。」と、大著には大著なりの条件を備えておくことが必要と諭す。

動物誌の基本的問題としての分類配列の体系は、当時リンネの分類体系が必ずしも広く受け入れられていたわけではなかった。生物を類型によって分類する方法（類型学）が世の中に深く浸透していたからであろう。そういう一般的状況を踏まえてギルバートはジョンに言う。「よければブラウンのように、あなたは自分の体系を確かに考案してよいのです。あなたはリンネの配列に従うとは明言していません。そういう方法をとれば、問題が読者の側に必ず起きます。スウェーデン人はそれにも拘らずブラウンを賞賛

しているのです。」と〔同上〕。

次いで大事な書名のことに触れる。「*Faunae Calpensis primitiae*（基礎ジブラルタル動物誌）というのはおそらく大分控え目でしょう。厳密にはリンネの *Fauna Suec.*（スウェーデン動物誌）はあなたのと同じ程度にしか完全な動物誌ではない。それは数百の動物がリンネの観察から漏れてしまっているに違いないからです。ベンジャミンは英語の本にラテン語の題を付けるのに反対です。‘Fauna Cal., or a Zool. Hist. of Gib.’（ジブラルタル動物誌）と英訳を付けることなどを考えてはどうでしょう。というのは博物誌としてはならないからです。植物が欠けていますから。」と、ギルバートはベンジャミンの意向も伝えながら代案も示す。さらに続けてこう言う。「リンネ的なものには何でも反対して出発した勇気があるのですから、私だったらタイトル頁をリンネ式のとはしません。あなたの書店にタイトル頁と読者への告知のことはちょっと相談しなくてはなりません。あなたの本を買ってくれる人の購買欲を刺激するために、少しさびの効いた、魅力的な事の次第の付け加え方を彼は一番よく知っているわけですから。」と、出版を成功させるためには書店の弟の意見を容れることが必要であることを強調する。そして商売上の注意として「印刷原稿を売ってしまうまでは絶対に印刷をしてはならないと、トマスと私の二人は考えています。書店の連中は印刷を離れて取引に同意する方法を知っており、また著者の手にある著作にいかにして冷や水をかけるかということも知っているのです。」と、十分気をつけるよう促す。当時の出版は印刷業者が出版し、販売するという形態であったため、また著作権法が未成熟であったため、著者がだまされて業者のみ儲けてしまうということが往々にしてあった。

ギルバートやトマスの熱心な助言にも拘らず、ジョンは自分の著作を出版したくないという気持ちに傾いていた。ベンジャミンとの手紙のやり取りによる出版条件その他の話合いがジョンの思い通りにならない状況にあったと推測される。

> 私たちは、あなたがどうして自分の仕事を自分で育てることから離れることができるのか、どうしても理解できません。というのは、見ていないものを買う人は誰もいないからです。その上、一時間の話合いは百通の手紙よりも多くの用事をすることでしょう。ベンジャミンは通常の条件であなたのために印刷し、出版してくれないのでしょうか。私たちはあなたの原稿を見てあちこち直したいと思いますが、それは見栄やおせっかいな気分からではなく、どの著者もちょっとした誤りを犯すことは避けられず、それは免れ得ないことだからです〔第21信〕。

と、ベンジャミンの気持ちをなだめるように、ギルバートは難しい事態を打開し、ジブラルタル動物誌の出版を何とか実現させようと懸命に努める。

タイトルの問題は容易に解決せず、その後も続いた。ギルバートはジョンに言う。「私たちはタイトル頁が気に入りません。ベンジャミンがその考えとして言うには“Hist. Nat.: Observations in Lat. 36°,”（博物誌：北緯36度での観察記録）はすべて削除し、

“An Essay,”などと始めるべきだということです。しかしタイトル頁を気にして時間を費すのは価値のないことです。スウィフトも言っています、「タイトル頁のことは書店に相談しなさい」と〔第22信：テムズ街発２月27日。この手紙には年が記されていないが、1776年または1777年と推定されている〕。

しかしジョンの固執するタイトル案の“Fauna Calp.”については、この専門用語は「タイトルの始まりとしてはあまりに古臭くて衒学的（げんがくてき）だと、みな判断しました。けれども次の理由から決して気落ちすることはないと思います。なぜならば、あなたは自分の本をそういうタイトルにする、とリンネにいつも言ってきたと思います。したがって、もしもリンネが彼の著書の最新版であなたの著書に言及するならば（必ずリンネはそうするでしょう）、あなたはその好意から得る名誉をすべて失ってしまうことになりましょう。あなたがそういうタイトルに少しも触れなければの話ですが。」と、ギルバートはさまざまな配慮を見せる。そして健康状態が危ぶまれていたリンネについて、「リンネが亡くなったとしても、彼の息子がきっと新版を出しますから。」と言う。

ジョンの著書の出版に関しては、ギルバートのセルボーンの比較的近くに住んでいた弟のトマスも心配して、その考えをいろいろとギルバートに伝えていた。

> あなたのタイトル案の“Zool. Anecdotes”（動物逸話）にトマスは全く賛成しません。後半がみすぼらし過ぎて大著には相応しくないと、彼は考えています。彼はまた「南スペインの四足動物、鳥類、魚類、昆虫の博物誌」などとすべきとも考えていません。私たちは鳥の渡りに関する何かぴりっとしたものをタイトル頁に入れてもらいたいとも思います。というのは、多くの読者は博物誌の他の箇所には目もくれませんが、渡りのような出来事には注目するのですから〔第23信：テムズ街発1776年３月５日〕。

と、ジョンの考えるタイトル案に異を唱える。

「植物に関しては言えることを言うのがよい。植物についての知識を好む人は増えていますから。主教（特にあなたの所の主教）でさえ自薦のために植物を研究しています。」と、ジブラルタルの植物のことは、たとえそれが少なくても時代の好みに合うのだから、書くほうがよいとジョンに勧める。当時はプラント・ハンターと呼ばれる人たちが世界各地に赴いて植物を採集し、イギリスに持ち帰っていた。そうした珍しい外来の植物が公園や庭園に植えられて、一般の人々の植物に対する関心を高めていたのであった。

ギルバートは図版に対しても何度かジョンに助言をしている。本に収載する「線画の数量は相当なものだと思います。線画は必ずロンドンで版にしてもらうべきです。植物の部分に関しては誰かに注意深く目を通してもらうべきです。動物の部分に関してはあなたの力量は相当に高いのですから、小さな誤りや不注意による書き違いを指摘してくれるような友人が、誰もが必要とするように、一人だけは必要です。」と、誤りを防ぐ

ための実際的な注意をする〔第24信：ファイフィールド発1776年５月15日〕。著者が往々にして見落してしまう誤り、思い違い、書き違いを正すためには第三者的な目がぜひとも必要なのである。これはギルバートが他の博物学者の著書を見て、さまざまな誤りのあることに日頃気づいていることから、そのような誤りの防止策として考えたことであったろう。

その後ジョンは体調をくずしてか、しばらく音沙汰がなかった。ギルバートは心配になって次のように書く。「体の具合が悪いのではないかと心配になってきました。著書や他の事柄にかまけて、おそらく最近は体のことを構わな過ぎたのでしょう。」として息抜きに乗馬や散歩をすることを勧める〔第25信：マンストーク発1776年８月９日〕。これに続けて「特に、いくら十分な理由があっても言い争いは避けなくてはなりません。本気になって興奮するのはどんな場合でも胃に悪いですから。」と書いているのは、ジョンが出版のことでベンジャミンと意見が合わず、ジブラルタル動物誌の出版が難航しており、両者が言い争っていることがギルバートの耳に入ったからであろう。ギルバートは兄として弟たちの間に不和の生じることを心から心配したのである。大目的であるジョンの出版がなかなか実現しないので、ギルバートは頭を痛めた。

1776年の第27信〔ファイフィールド発11月12日〕ではギルバートはジョンの健康のことを気遣っているが、この時トマスもリウマチで具合が悪かった。ジョンの体調の悪いことは原稿にも表れていた。「原稿に関して、あなたはどうも元気がないように思われ、著者としての重要な責務を担っていません。…もしもあなたが（何がしかの金銭を）望むのであれば、私は喜んでそのことは大目に見ましょう…。私が見たところでは幾つかの記事は長過ぎると思われます。」と言い、金銭的な問題はジョンの希望するように解決するとしても、原稿の内容は世の中に出せるしっかりとしたものであることが大事、というのがギルバートの考えであった。

叔母のスヌーク夫人が脳卒中で倒れ、半身不随になったという知らせを受けてギルバートは夫人の住むリングマーに大急ぎで出掛け、そこから出したのが1777年９月11日付の第30信である。

> 弟のハリー〔ヘンリー〕が８月の第一週にあなたの原稿を届けてくれました。しかし急ぎの仕事、客人、家の改築工事のことがあって、まだ少ししか目を通すことができずにおります。今のところ、私は原稿に対してしかるべき関心を払っておりませんけれども、客人の一人が大変注意深く原稿を読んでくれました…。その客というのはギリシアを旅行したチャンドラー博士[8]で博物学者ではありませんが、リンネの分類体系をひいきにしてはおらず、リンネの体系はあなたの本が広く受け入れられる妨げになると主張しています。この問題について彼と私とは真剣にずいぶん話合いました。

として、これに続けてチャンドラー博士の意見をいろいろと記す。すなわち、「奇妙な

外観（これは博士の用いた言葉ですが）」は止めにすれば、きっと誰もが200ポンドの値打ちがある本だと思うだろうとか、綱と目（もく）の所は他の数章と入れ替え、表組みは全部巻末へ回す。さらにリンネなどに関しては各ページの脚注で触れるのがよい、という思い切った改良案であった。ここで言う「奇妙な外観」というのは、既に述べたラテン語交じりのタイトルのことであると思われる。

チャンドラー博士も市場性ということに配慮して本の内容構成を行うべきだ、という考えである。数字ばかりの表組みは大多数の読者には敬遠されてしまうが、喜ぶ読者もあろう、と博士は見ていた。このチャンドラー博士の意見の後で、ギルバートは言う。「私の気づいたことですが、書店は近頃、博物学書の新刊にリンネの付けた学名を加えています。その理由は今やリンネを軽蔑するのが流行ですが、多くの人はひそかにリンネの分類法を理解しようと切望しているからです。どうか私の言ったことを真剣に検討して、博士の言う200ポンドのことも考慮して下さい。」と、頑ななジョンの翻意を促すべく切々と説いて聞かせる。

リングマーでの叔母の見舞いから帰った後、ギルバートはオックスフォードに呼び出されてコレッジの仕事をし、またモードリン・コレッジの文書館でセルボーンに関する古文書を調べてきた。「私が古誌研究家として研究する際にチャンドラー博士は驚くほど友好的で、教えられるところの多い人です。この土地について私が発見したことは多大です。私たちは366の羊皮紙文書を調べました。」と、セルボーンの古誌研究の成果があったことを記す〔第31信：セルボーン発1777年10月31日〕。これに続けてギルバートはジョンの原稿を読んでの感想を記す。「原稿を昆虫の部分を除き、全部を一度読み直したところですが、幾つかの部分はさらにもう一度読み直そうとしています。全体的にはあなたの本は大変良いと思います。序文はきちんとしていますし、本文は本当の博物誌と呼べるものです。なぜならば奇聞と事実に富んでいるからです。そしてツバメ類に関する論述は、私がこれまでに見た中で最も優れた論文だと本当に思います。これらの論文は渡りという謎に包まれているが、好奇心をそそる行動に大いに光を当てているからですし、これだけでもどんな本も埋没させないだけの価値を持っているのです。」と、ジョンの本の長所を褒める。特にツバメ類の渡りはギルバートが深い関心を持っているテーマであったから、ジョンの論文を読んで啓発されるところが多かったのであろう。

ギルバートは清明な文体で『セルボーン博物誌』を書き、文章表現における言葉遣い、リズムなどに細心の注意を払っていたから、ジョンの神経の行き届かない文章、用語が非常に気になった。

> 公平な批評家として、言わなければならないことは（他の人たちも私と同じように考えるのですが）時々あなたの文体はちょっと散漫で、センテンスが長過ぎます。私がいちばん驚くのは時々同じ動詞あるいはその派生語を一つのパラグラフの中で五、六度使うだけでなく、時には同じセンテンスの中で二、三度使うこともあるこ

とです。私はあなたの研究が名誉を失わないように気を配っていますので、このような間違いを許容するわけにはいかず、その幾つかは思い切って直しましたが、どれだけ成功したかはあなたの判断にゆだねなければなりません。ですから、申し分なく有能なあなたに、言葉遣いをこれまでになく厳しい目で点検してもらいたいのです。

と、文体および語の使い方の見直しを求める。

前信でチャンドラー博士の意見を伝えたところ、ジョンは強く反発したようである。「(リンネの) 分類体系はすべて退けるというチャンドラー博士の提案を、あなたが苦々しく思ったのは少しも不思議ではありません。博士の忠告を伝えた理由はあの分類体系があなたと書店との間の障害になっていると、その時思ったからです。」と、リンネの分類体系をめぐって意見が分かれ、激しい言葉のやり取りがあった弟たちの仲をギルバートは心配した。そういう争いのあったことは全部忘れ、フリート街でベンジャミンと和解して仕事を何とか進めるようにするのが最良ではないかと、弟たちの壊れた関係の修復と頓挫している仕事を早く進めることを勧める。ギルバートからジョンへのこの最後の手紙でギルバートは、校正は自分でやること、すべての科の前にリンネがやっているように用語の解説を付けることをジョンに要請する。用語解説を付ければ「これによって人々はリンネの用語を次第に受け入れるようになると思う。」と、ジョンの固執するリンネの分類法を採用することの障害を取り除く具体案をも示す。

しかし、このようなギルバートを初めとする周囲の人たちの懸命の努力、実際的な助言と忠告にも拘らず、ジョンのジブラルタル博物誌はついに日の目を見ずに終った。それは弟の博物研究の著書が世に出て、内容、形共に人々に広く受け入れられることをひたすら願ったギルバートにとっては痛恨の極みであった。さらに、長らくリュウマチを患っていたジョンは1780年11月21日に永眠した。これはギルバートの死去に先立つこと13年も前であった。

4．ギルバートの心境と身辺

1771年の第 2 信でギルバートは、「事態の推移する中で、セルボーン博物誌を1769年の日誌の形で書こうと考え始めている」と、ジョンに書いている。これは自然研究上の文通相手の一人であるバリングトン（Daines　Barrington）から、セルボーン周辺の動物誌を書いてはどうかと提案されて逡巡していたが、いよいよギルバートが出版の意志を固めつつあることを示している[9)]。ギルバートの決意がさらに強固になってきたのは1774年 4 月の第13信である。「日誌全部を材料にして、この地方の博物誌、特に鳥類についてかなり理解できるような一連の出来事を集めることができると思います。さらに同じ主題に関する半世紀にわたる手紙、そのほとんどが非常に長いものではありますが、を持っています。それらの手紙はすべて（見てもらうに値すると考えられるなら）一緒に適度の一冊を構成するということになりましょう。」と、ギルバートの構想はか

なり具体的になってきた。セルボーンの環境、最も珍しい植物、幾つかの古誌については「私にそれに取掛ろうとするだけの決意と気概があれば、すぐに著作にまとめられましょう。」と、控え目で慎重であったギルバートが自信の程を見せている。その後ギルバートの仕事が順調に進んでいたことは、1773年12月の第８信でジョンに「もしもあなたが急がないのであれば、私が先に出版することになるでしょう。」と書いていることから窺える。

ジョンの息子のジャックはジブラルタルの親元を離れ、イングランドに来て伯父のギルバートの家から通学していた。独身で家族のいないギルバートはこの甥をわが子のように可愛がり、その成長の様子を手紙を書くたびに細かくジョンに報告していた。

「ご存知のごとくこの村でははしかが大流行し、息子さんが罹患したと聞いても大して驚かないでしょう。しかし、彼がはしかに罹っていて、今朝初めて起き上がったと聞けば、びっくりはしても嬉しく思うでしょう。息子さんは土曜日にちょっと元気がなくなり、月曜日に寝込み、咳もせず、熱もなく、悪い症状は一切なしで今朝まで寝ておりました。」と、ジャックがはしかに罹ったことと病状を知らせる〔1773年６月17日付の第３信〕。ちょうどギルバートの家に来ていたトマスが夜、鎮静のための紅茶を飲ませたりしてよく眠らせ、翌朝ジャックは快方に向っていた。見舞いに来た近所の二人も具合の良いことを認めて帰った。「ジャックはずっと哲学者のように振舞い、寝室に閉じ込められるのを嫌がったり、不平を言ったりせずに甘んじて受け入れました。」と、病気にも拘らず愚図ったりしなかった甥の態度の良さを褒めている。

ジャックはその後すっかり健康を取り戻した。第３信に続く６月26日付の第４信では「甥はずっと全く元気で、あの病気が治ってからはほとんど咳さえもしません。ジャックは家に来たときから声が幾分しわがれていましたが、これは初め風邪のせいだと思いました。しかし、これは考えてみると、おそらくこの年頃の若い人にありがちなことが原因となっているようです。」と、ジャックが変声期にあることを知らせている。15歳になっていたジャックは行儀がよく、大変親切で、進んでギルバートの手助けをした。

ジャックはどんどん背が伸び、手足が大きくなっていた。〔近くの村ニュートンの牧師で背が高かったと思われる〕ヨールデン氏（Mr. Yalden）よりもちょっと高くなっていた〔1773年12月の第８信〕。身体の面だけではなく、ジャックは精神的にも大きく成長していた。「ジャックは時間を全く無駄にしません。なぜなら、彼は〔古典を〕文法的に解剖して翻訳し、あるいは地図を細かく調べたり、毎日手紙を書いたりしているからです〔1774年12月の第９信〕。これに続けて「彼は『スペクテイター』（*Spectator*）３巻全部を楽しみ味わいながら読み通したということは、彼がそれを理解したということを示しています。またダラム（William Derham）の『自然神学』（*Physico-theology*）を大いに楽しみ、今はブライドン（Brydon）とハミルトン卿（Sir W. Hamilton）の書簡集に取掛っています。それでその間ずっと地図を調べさせているのです。」と、ジャックの勉強ぶりを伝えている。

このように知的な関心も高まってきたジャックはギルバートにとって「本当に役に立

ち、孤独な私の良き相手」〔1774年２月の第10信〕であったが、ジョンがジブラルタルから帰ってきている今はいつまでも甥を手元に置くことに躊躇いがあった。「私はご子息をかくも長く引留めていることを幾重にもお詫びしなければなりません。けれども、もしもあなたが自制心を大いに働かせて下さり、秋までご子息を私の手元においておくことが望めるなら」ジャックと一緒にジョンの所に行く予定であるが、それでよいかと相手の意向を訊いている。これは前からギルバートが、ランカシャーのブラックバーンに住むジョンの家を訪れ、自然探索をするよう招かれていたが、公務のために長期間留守に出来ず、約束を果せないことの詫びである。その約束を秋には実現できそうな状況になっており、その時にジャックを送り届けることでよいか、という話である。

ギルバートは当時ファリンドン教区の副牧師を務めていたが、長期間留守にすることは辞職につながる惧れがあるため、それを防ぐにはその間の代役を務めてくれる人を探す必要があった。それは教会という組織を通して行わなくてはならず、なかなかギルバートの思うようには事が進まなかった。そのうえ、母校オックスフォード大学のフェローの仕事、またホワイト家の財産相続に関してのもめ事もあった。「隣人のロバートソン氏が私の副牧師職を引受けたい気があると言い、秋にはそうすることが出来るだろうと考えています。そうすれば秋には私はランカシャーを見られると大いに期待します。」と、ギルバートは楽観的になっていた〔1774年７月の第15信〕。

しかし、1774年の秋にギルバートがランカシャーのジョンの家を訪れたことは知られておらず、ジヤックも依然としてギルバートの家に住んでいた。ジャックは身長が６フィートもある青年に成長しており、ギルバートはもう幼名のジャックでは呼べず、ジョンと呼ばなければならないほどに振舞いも大人らしくなっていた〔1776年１月の第21信〕。

ギルバートの手紙には気象のことがいつも記されていたが、弟ジョンへの最後の手紙とされるセルボーン発の1777年10月31日付の第31信にも、「私の所の天気は非常な荒れ模様です。温度計は昨日は28.375でした。」と、末尾の方に書かれていた。

５．結　び

ギルバート・ホワイトから弟ジョンへの手紙を読んで第一に気がつくのは、ギルバートの勧めでジブラルタルの自然研究を行うようになった弟からの疑問に答え、研究上の指導をし、助言を与えていることである。ギルバートは、それぞれの土地に住む人が自分の土地の自然を研究することが自然研究の範囲を広げ、内容を充実させる、と考えていた。さらに、野外で観察した事実に基づいて動物、とりわけ鳥の行動、習性の真実を見出すという研究態度をとっていた。博物学書の著者たちの記述をそのまま信用することはなく、書かれていることの誤りを見つけ、それをジョンに知らせていた。ジョンからの質問に対しては、観察したことを知らせてもらい、また送られてくる標本を見て判断し、慎重に答えた。イングランドとは動物相の異なるジブラルタルの動物については、判断に苦しむこともあった。

リンネの著した『自然の体系』に分類されている動物名に疑問を抱いたジョンは、ギルバートの助言でリンネに直接手紙を書いて、疑問点の解明を試みた。リンネの所には各国の研究者から手紙がきていたせいか、リンネからの返事はくるのが遅かった。ギルバートはリンネだけではなく、レイ、スコポリ、ペナントなどの博物学者の著書を批判的に見て、分類法の問題点、記述内容が時に事実と異なることがあること、記述が不十分な場合があることを指摘し、また疑問点、誤りを指摘している。

第二に、ジョンの研究が「ジブラルタル博物誌」として出版されるよう、ギルバートは熱心に後押しをしていたことである。それには研究内容についてはもちろんのこと、文章表現、書名などについて細かく助言をした。とりわけ、書名についてはタイトルページで何と謳うかが読者の購買動機につながる大事な要素であると考え、ジョンの固執する案に再三考え直しをするように迫り、他の弟、知人の意見を伝えている。ロンドンで書店を営む弟のベンジャミンがジョンの著書の出版をしてくれることになっていたから、ベンジャミンの反対するタイトルは避けなければならなかったのだが、ジョンは頑なであった。

リンネの分類法は、当時のイギリスでは謂れなく不人気であった。新しい考え方に対して人々の意識がまだ追いついていなかったからだと思われるが、少数ではあるけれどもリンネの分類法に密かに関心を示す人もいるにはいた。しかし、表立って博物書のタイトル頁にリンネの分類方式に従っていると謳うことは商売としては大きな冒険であり、ベンジャミンが猛反対する理由であった。

ジョンの著書の出版のことで弟たちの関係が険悪になってしまったことにギルバートは心を痛め、ジョンに諄々と言って聞かせるのだが、ジョンとベンジャミンの書店との折合いはつかなかった。こうしてジョンの「ジブラルタル博物誌」はギルバートの願いと努力も空しく、日の目を見ることがなかった。

手紙から読み取れることの第三は、ギルバートの独り身の寂しさを紛らせてくれる甥のジャックについての記述の多いことである。ジャックはジョンの子供であり、ジョンがジブラルタル在任中にギルバートの家から通学するためにイングランドに来ていたのだが、ジョンがジブラルタルから帰ってきてからも、ジャックは何年間かはギルバートの所にいた。その間にジャックは心身ともに成長し、大人としての振舞いを見せるようになり、幅広い読書をしてギルバートの良き相手となっていることを、ギルバートはジョンにつぶさに報告している。

このほか、ギルバートのジョンへの手紙にはギルバートが大いに関心を持っていた気象のこと、出版を目指しての『セルボーン博物誌』への取組み、ホワイト家の財産相続に関わること、家の改築のこと、叔母のスヌーク夫人の病状、その他のことが書かれているが、これらからはギルバートの日常の様子、研究状況、当時のイングランドの事情などがわかる。また、手紙全部を通してギルバートの温かい人柄、人間性が十分に感じ取れる。

注

1）Thomas White (1724-88). ウィリアム・ヨールデン氏と組んでロンドンのテムズ街で卸売商を営む．事業から引退後，王立協会会員に選ばれ，植物学と古誌を研究した．

2）Benjamin White (1725-94). ウィストン氏と協同でロンドンのフリート街51番地で書店を営み，博物学書の出版販売業者として当時栄えた．

3）John White (1727-80). オックス大学クリスティ・コレッジを卒業．ジブラルタルから帰国後はランカシャーのブラックバーンの教区主管代理牧師を務める．

4）Henry White (1735-88). ギルバートの援助でオックスフォード大学オーリオル・コレッジを卒業．ハンプシャーのファイフィールドの教区牧師で，ウィルトシャーのアプヘイブンの教区主管代理牧師も務める．

5）T. Bell's Edition of "Selborne" (John Van Voorst, 1877), vol. 2, p. 37.

6）Ibid., p. 94.

7）B. Sharpe's Edition of "Selborne" (S. T. Freemantle, 1900), vol. 1, p. 119.

8）Dr. Richard Chandler (1738-1810). オックスフォード大学クィーンズ・コレッジで学ぶ．小アジアとギリシアの古誌調査旅行をし，旅行記を出版した．セルボーンのすぐ近くに土地を与えられて住み，ギルバート・ホワイトの古誌研究を助けた．

9）門井昭夫「『セルボーン博物誌』の誕生」（『英米文学評論』2003年冬季号）．

参考文献

Holt-White, R., *The Life and Letters of Gilbert White of Selborne* (John Murray, 1901), 2 vols.

Mabey, R., *Gilbert White* (Century Hutchinson, 1986).

Singer, C., *A History of Biology* ; Third and Revised Edition (Abelard-Schuman, 1959).

門井昭夫「不滅の自然探究者」（『イギリス文学グラフィティ』愛育社，1978）．

門井昭夫「ギルバート・ホワイトと弟ジョン」―未刊の『ジブラルタル博物誌』をめぐって（『英米文学評論』1986年春季号）．

門井昭夫「ギルバート・ホワイト孤愁の日々―リチャード・メイビー『ギルバート・ホワイト伝』を読む」（『英米文学評論』1988年冬季号）．

門井昭夫「ギルバート・ホワイト『セルボーン博物誌』の魅力」（『健康科学大学紀要』2008年第 4 号）．

千葉県立中央博物館編『リンネと博物学―自然誌科学の源流―』（千葉県立中央博物館友の会，1994）．

八杉龍一『生物学の歴史』上巻（日本放送出版協会，1984）．

Abstract

Gilbert White, the author of *The Natural History and Antiquities of Selborne,* recommended to his brother John, who lived in Gibraltar at that time, to make daily observations of the flora and fauna of Gibraltar. Gilbert exchanged letters with John, who asked Gilbert questions concerning strange birds, insects, and so on.

When we read Gilbert's thirty-one letters addressed to John, we can learn much of how Gilbert thought and how the studies of natural history were in those days. The number of species known was rapidly increasing in the seventeenth and eighteenth centuries and it became essential to find some method for the orderly arrangement of the species of plants and animals. John Ray and Carl von Linné were the chief founders of classificatory systems. However, the Linnean system was not popular in England. Gilbert looked at the Linnean system critically, and was sometimes dissatisfied with Ray's and other naturalists' descriptions of birds.

John intended to publish his work 'The Natural History of Gibraltar' with Gilbert's moral support. In spite of Gilbert's advice and encouragement, John's work did not see the light of day. The reason will be made clear in this paper.

Furthermore, some of Gilbert's thoughts and his relationship with his nephew, Jack, will also be examined.

Key Words : White, Gilbert
White, John
Linné, Carl von
The Natural History of Selborne
natural history
18th century